

Title	際立ちゆく<琴の一族> : 「蔵開」の巻より
Author(s)	芦田, 優希子
Citation	詞林. 1997, 21, p. 22-30
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67396">https://doi.org/10.18910/67396</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 際立ちゆくへ琴の一族

—「蔵開」の巻より—

芦田 優希子

一、へ琴の一族の形成における「蔵開」の意義

「うつほ物語」は、秘琴物語・貴宮求婚物語・立太子争い物語と大きく三つに分けられる。物語は、「俊蔭」の巻といふ秘琴物語から始まり、「藤原の君」の巻以降、貴宮求婚物語へと話の主題が移り、再び秘琴物語へと戻る。その幕開けとなる巻として位置づけられているのが、「蔵開」の巻である。

「蔵開」は、「俊蔭」の内容をもう一度引き寄せるために、仲忠が京極邸の蔵を開け、俊蔭の残した文書を発見することから始まっている。

その文書は、「昔、累代の博士の家なりける」（蔵開・上・四六七頁）<sup>2</sup> 清原家に代々伝わるものであったが、

「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書き

て侍りけると、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」

（蔵開・上・五二七―五二八頁）

と仲忠が言っているように、そこには「家の記・集のやうなる物」という俊蔭とその父母の日記や歌集が含まれていた。<sup>3</sup> それを受け継いだことで、俊蔭によつてもたらされ、俊蔭女・仲忠へと伝えられてきた琴に秘められた一族の過去、すなわち俊蔭の苦難に満ちた漂流中の出来事や父母の悲しみなどを、仲忠は真に理解することになる。ここで初めて仲忠は、俊蔭を始祖としたへ琴の一族を認識し、その三代目としての自覚を持ったのだ。仲忠が、へ琴の一族を確立するためには、琴と秘曲の伝承だけではなく、琴に秘められた一族の由来を、「学問」という形で継承することが必要だったのである。<sup>4</sup>

この時、へ琴の一族を確立した仲忠は、琴を伝授する側へと立場を変え、「楼の上」においてへ琴の一族を継承のた

めの秘琴伝授を行う基盤を築いたことになる。しかし、その基盤だけでは秘琴伝授を行うに不十分である。さらに、ここで確立したへ琴の一族が独自性・優越性を保ち続けなければならぬ。その始まりは「蔵開」にみることができぬ。

「蔵開」で仲忠は、様々な人物との比較を通してすぐれている点を強調されている。すでに「俊蔭」において、

「…この山の族、七人にあたる人を、三代の孫に得べし。その孫、人の腹に宿るまじき者なれど、この日の本の国に契り結べる因縁あるによりて、その果報豊かなるべし」  
(俊蔭・一八頁)

と予言された仲忠は、「蔵開」で特別な役割を担うにあざわしい人物だったのである。この点からも、仲忠をへ琴の一族の中心に据えて「蔵開」を考察することは、至極もつともなことだといえよう。

本稿では、「蔵開」における仲忠を中心としたへ琴の一族と、藤原氏・正頼一族・天皇家との関わりの中に、如何にしてへ琴の一族が際立っていくかをみていきたい。

## 二、際立ちゆくへ琴の一族

### (1) 清原氏と藤原氏

仲忠は、俊蔭女より清原氏の血を、兼雅より藤原氏の血をひいている人物である。

先に述べたように、清原氏は学問の家であり、へ琴の一族にとって「学問」とは、俊蔭・俊蔭女・仲忠という清原氏の血を自覚させるものであった。つまり、琴の伝承の裏付けとなる「学問」を伝える清原氏の血は、へ琴の一族の基盤であり根幹であるといえることができる。

一方藤原氏の血は、へ琴の一族を確立するため、仲忠に、貴族社会の中心となつて物語の表舞台に立つ力を与えるものであった。しかし、それゆえに仲忠を藤原氏の政治力の一端に取り込んでしまう事態となり、へ琴の一族が藤原氏の力の前に埋没する恐れが出てくる。へ琴の一族の三代目としての仲忠ではなく、「藤原」仲忠が強調されてしまうのである。

そのため「蔵開」では、仲忠から藤原氏の影響力が取り除かれようとしている。

かくて、「除目待なるを、参らせ給はむとやる」。おとど、「何しにかは参らむ。出でて歩けば、そこにも面伏せにて、人の、人とも見たらねば、生きたる効もなきに」。大臣、闕の侍らざらむには、いかでかは。父おとど、「などかは、その闕のなからむ。この頃こそ、かく金釘のやうに固まりためれ。そこを御婚にして、中納言になさるとて空けられし闕には、親とてあるおのれをこそなされましか。仁寿殿を思して、その親を引き越してなされたるは、さるべきこと

かは。おのづから、右のおとど参り給ひて、心に任せ  
てし給びてむ。殊なることなくは、交じろひせじと  
す。』。(蔵開・中・五六八頁)

ここでは、中納言へと官位が上がり評価も高い仲忠に対し、  
除目に不満を持ち、ろくに出仕もしていない父兼雅の姿が描  
かれている。政治権力の中枢にいる藤原兼雅の評価が下がっ  
ているのである。このことは、藤原氏の影響力が弱まること  
につながり、仲忠の中の「藤原」仲忠は薄められる。その上  
で、仲忠自身の評価が高まることによつて、もう一方の「清  
原」仲忠、すなわち「琴の一族」としての仲忠が浮上し、強  
まるのである。

このように藤原氏の權威を失墜させ、「琴の一族」を際立  
たせる方法は、次の「国譲」の巻以降にもみることができ  
る。ただ「国譲」「楼の上」になると、かえつて琴の伝承者  
から仲忠が外されることになる。今は詳細な考察は省くが、  
「国譲」の立太子争いで、藤原氏の血を強めてしまった仲忠  
は、「琴の一族」の純粹さを失つてしまふのだった。

ともかく、「琴の一族」を際立たせる方法は、「蔵開」以  
降、一貫して働いているのは確かなことなのである。

## (2) 正頼一族

さて、次に藤原氏だけではなく他の一族の影響を考えるに

あたつて、女一宮による天皇家の血と正頼一族の血の影響を  
取り上げねばならない。なぜなら、「蔵開」では、女一宮と  
の間に琴の後継者となる犬宮が誕生するからである。

仲忠は、

かくて、ここばかりの男・女、男も、妻具し給へる、さ  
らにはか住みせさせ奉り給はず、「大きな家なり。  
わが世の限りは、かくて住み給へ。ほかへおはせむは、  
わが子にあらず」と聞こえ給ひて、

(藤原の君・六九頁)

という正頼の方針により、婿の一人として正頼の屋敷に住ま  
わされている。この状況のままでは、仲忠が正頼一族に取り  
込まれてしまふ。それを防ぐために、「蔵開」では、藤原氏  
の場合と同様に、「琴の一族」との引き離しがいくつみら  
れる。

まず、もつとも顕著な例は、帝の御前で俊蔭の残した文書  
を仲忠が講じる時である。

大将、「見給へしすなはち奏すべく侍るを、かの書の  
序に言ひて侍るやうにも、「唐の間の記は、俊蔭の朝  
臣のまうで来るまでは、異人見るべからず。その間、  
「靈添ひて守る」と申したり。俊蔭の朝臣の遺言、先の  
書には、「俊蔭、後侍らず。文書のことは、わづかな  
る女子知るべきにあらず。一、三代の間にも、後出で  
まで来ば、そがためなり。その間、「靈寄りて守らむ」

となむ申して侍る。それに慎みて、今まで奏せて侍り  
つる。」  
(蔵開・上・五二八頁)

この文書は、傍線部のように、仲忠以外の手に渡らないよ  
うに守られてきたものである。そのことを知る帝も、その文  
書を仲忠に読ませるにあたって、

・上、「朝臣の読みて聞かせむには、その靈ども、よも  
祟りはなさじ。…」とのたまふ。(蔵開・上・五二八頁)

・「人に聞かせじ」とて、高くも読まず、御前には人も  
參らせ給はず。誦せさせ給ふばかりをぞ、わづかに聞  
きける。  
(蔵開・中・五三五頁)

というように他人に聞かせようとはしない。この時ここで仲  
忠の講じる文書を聞くことができたのは、

・上の御前に琴の御琴、春宮の御前に箏の御琴、五の宮琵琶、御前ごとにもち置きて、大將は書読み給ふ。  
(蔵開・中・五四一頁)

・四所さし向かひて、人に聞かせて聞こし召す。

(蔵開・中・五四八頁)

とあるように、帝と東宮と五の宮のみであった。一般にこれ  
は、天皇家の者だけが聞くことを許されているのだと考えら  
れているが、そこにもう一つ意味を見いだすことができるの  
ではないだろうか。

それは、東宮も五の宮も仁寿殿腹ではなく、後の宮腹の親  
王だということである。

さらに、後の宮もかすかながら、仲忠が講じる内容を耳に  
している。<sup>7)</sup>

「かかることあり」とて、御簾のもとに後の宮おはせ  
ば、上は、大將に御目くはせて、みそかに読ませ給  
ふ。後の宮、「内裏こそ、聞かせ給はざらぬ。講師  
は、心せよ」とのたまへば、え読までとりくひもて候  
ふ。上、「いと悪き朝臣なりけり。かくな臆せられ  
そ。ただ、言ふに従ひて読め。これは、誰も誰も読み  
つべけれど、そゑに異人の読まじき由のあれば、ま  
づ読まするぞ」とのたまへば、少し高く読む。所々  
は、声にも読む。後の宮、いみじう憎み給ふ。され  
ど、いとよく聞こし召す。異人は、え聞き知らず。  
(蔵開・中・五四八頁)

順当に考えれば、その場に居るのは帝の寵愛が一番深い仁  
寿殿であるべきであったのに、実際には、仁寿殿も仁寿殿腹  
の皇子達も全く登場しない。今まではほとんど登場しなかつた  
後の宮を取り上げ、仁寿殿の方を疎外するのは、仁寿殿が正  
頼一族の女であるからに他ならない。これは、(琴の一族)  
の基盤である文書を講じる場に、仁寿殿をはじめとする正頼  
一族の存在を許さないことで、正頼一族に取り込まれない  
(琴の一族)の姿を象徴していると考えることができよう。

(琴の一族)と正頼一族との距離を保つための対比は他に  
もみられる。

正頼は大将を退くにあたつて、

「…この職は、とどめられれば、論なう、このわたりにぞあらむ。」「その所、権中納言の朝臣にもがな」と思ふを、その心を思ひて、かの朝臣に譲りげなる気色取らせてを」

(蔵開・上・五二四頁)

と仲忠に大将職をゆずる。そこに隠された意味付けとして齋藤正志氏は、正頼と仲忠の持つ「姓の両義性」という共通性をあげ、(藤原氏の性格)という共通項を架け橋として、正頼から仲忠に政治的権力が移譲されると述べられている。確かに、正頼は一世の源氏でありながら同時に藤原氏としての性格を持ち、仲忠は清原氏と藤原氏という二つの意味合いを持つという共通点は存在する。さらに二人とも時の帝の女一宮を得るといふ点においても同じである。しかし、そのような同じ造型が成されながらも、娘たちを嫁がせることで婿たちを取り込むというヨコのつながりで権力を保つ正頼と、あくまでも「琴の一族」を確立しようとする仲忠とは、めざしている一族のあり方が異なっている。だからこそ、「琴の一族」と正頼一族の違いがいつそう強調されているといえよう。

また「蔵開」では、親と子の関係を重んじる「琴の一族」とは対照的に、正頼一族の親と子のなげきが描かれている。

①「…「心地も痴れぬべきものなめり」となむ嘆かる」。

(蔵開・下・六〇〇頁)

②「…里にありし昔のみ恋しくて、」あらしものを。何せむに、かく出だし立てられてあらむ」と思へば、心憂く悲しきことも多くなむ」。

(蔵開・上・五二二頁)

③「…「宮仕へに」とて出だし立てたれど、思ふやうにもあらず。」「後ろやすく」と頼み聞こえし人さへ許さず、心憂きことどもの多かんなれば、常に思ひ嘆く」と聞き侍るは、いとうたてくなむ。…」。

(蔵開・上・五二二頁)

④おとど、爪弾きをして、「女子を持ちたらむ人は、よき犬・乞丐なりけり。中に、「らうたし」と思ひし者をしも出だし立てて、かかる耳を聞くこと。なほ、犬・鳥にも呉れて、籠め据えたらましものを」と言ひ、立ち給ひつるを、

(蔵開・下・五九三頁)

①は子に対する正頼の親としてのなげき、②は東宮の偏愛をうけ、宮仕への気苦労を背負った藤壺のなげき、そして③④は入内させたことを後悔する正頼と妻の大宮のなげき、というように、いくつも見られるのである。その中でも、②のような藤壺のなげきは、東宮との仲がかんばしくないことを示しており、仲忠と女一宮とが円満であることを強めるものとして、比較の対象にされることが多い。女一宮は、藤壺が讃えられるばかりであった貴宮求婚譚では、ほとんど述べられないことはなかったが、この「蔵開」では、仲忠の妻として、また大宮の母として藤壺にまさるとも劣らない女性として描

かれています。例えば、

「……ここに候はざらましかば、かく思ひ給へてぞ侍らまし。その御心を失はせ給へるこそ、あが君は、いとうれしくおほえ給へ。異人は、かく思ひ消たせざらまし。初めは、いとこそわびしかりしか。ここにまうで来し夜までは。見奉りしかば、忘れ侍りにき。今、はた、いぬなど侍れば。」と「さ思ひ侍りけむ」とこそ。……」

(蔵開・上・五三頁)

と、仲忠が藤壺を忘れることができたのは女一宮の存在があったからこそだといわれている。また、藤壺が、

「なかなか、いとよしや。よに心憎く思ひたる人につき給ひて、一所、心安く。……」(蔵開・上・五二頁)

と、仲忠と結婚した女一宮をうらやましく思うなど、藤壺の不幸はさらに女一宮を高めることにつながっている。「楼の上」の琴の伝授では疎外される女一宮ではあるが、この「蔵開」で彼女の評価を高めることは、藤壺の求婚争いで仲忠が藤壺を得られなかった以上、仲忠の、ひいては「琴の一族」の優越を示すために必要なことなのである。

また、藤壺と同様に、幸福とはいえない女性に、藤壺の姉であり、同じく入内した立場にある仁寿殿がいる。

「仁寿殿の女御の、思ふやうにめでたき人なり。宮仕へは、同じき帝と聞こゆれど、上に、限りなく時めかされ奉りたり。娘は、かく世に類なき人に、二つなく

思はせたり。めでたし。男皇子たちは、いとうつくしげに、かたちよく、人に褒められつつ、あまた持たり。ただ、「后に据え、坊に据えず」と言ふばかりにこそはあめれ」。また、異人の言ふ、「されど、これは、時々、人參上りなどす。春宮のこそ、いみじかなれ。また二つ人あるものとも知り給はで、年ごろになりぬ。などか。坊がねは持たり。いみじき者なめりかり」。……」

(蔵開・上・五六頁)

とあるように、二人とも時めいてはいるが、藤壺は東宮候補の皇子を持ちながら、周囲からねたまれるなど、なげきに満ちた宮廷生活を送っているし、仁寿殿は朱雀院とは睦まじいものの自分の生んだ皇子を東宮に立てることは叶わず、自らも后に立つことはできなかった女性として、どちらも真に幸福な女性とはいえない造型が成されている。

では、入内して真に幸福である女性是谁なのかと考える時、これらの比較対象として思い浮かぶのが、「琴の一族」として後に入内するであろう犬宮の姿である。犬宮に対し、藤壺も仁寿殿もどちらも正頼一族の女性であることから、これも「琴の一族」と正頼一族との距離を隔てるものとして考えることは可能であろう。

### (3) 天皇家

女一宮からのもう一つの影響、天皇家の血を考えるにあたって、仲忠と比べられる天皇家の人物は東宮である。「蔵開」において、「見給ふ人は、殊にはなやかにも見え給はず」(蔵開・上・五二二頁)と藤壺が東宮をあまり評価していないように、東宮の評価は低く、その一方で、仲忠はすぐれた人物として描かれている。このように比較される理由としては、藤壺ばかり寵愛する東宮を、正頼一族に取り込まれた人物として疎外するためと考えられる。しかし、ここでは、東宮が疎外される要因を、正頼一族ではなく天皇家に求め、「蔵開」において天皇家そのものとも少し距離をおこうとするへ琴の一族の姿をみてもいい。

仲忠が帝の御前で俊蔭の残した文書を講じる場面で、共にそれを聞くことができたのは、帝の他に後の宮腹の東宮と五の宮だけであったということはすでに述べたが、その中でも東宮だけが少し異なつて描かれている。

暁方に、いと面白き所あり、大将に誦せさせ給ひ、我も誦じ給ふ。五の宮に、「誦ぜよ」とのたまへば、ともかくものたまはで、うち出でて誦じ給ふ声、いと面白し。春宮、誦し給はず。

残りの三人が唱和して「おもしろき句あるところ」を誦じて

いるのに、東宮は誦じていないのである。

このことを藤壺のことを考えるあまり、集中力を欠いた東宮の姿として、考えることもできる。しかし、天皇家から距離をおいて際立とうとするへ琴の一族の立場から考えると、東宮の評価が下がることは、この東宮が即位した時にもまだへ琴の一族は天皇家とは合体しないということを表現していると思えらるのではないだろうか。つまり、この東宮では、へ琴の一族のへ琴とへ学問を得るに値しないといえよう。純粋なへ琴の一族として犬宮が入内し、東宮を産み、その東宮が帝になる時に、始めて、へ琴の一族と合体するにふさわしい人物が得られると思われるのである。

この「蔵開」において、東宮が仲忠に比べあまりすぐれていない人物として描かれているのは、後に犬宮によつてへ琴の一族の血を受け継ぐ、真にすぐれた帝王を登場させるための布石といふことができる。

また、五の宮も、東宮と同様、聞く権利を与えられると同時に、へ琴の一族と近づきすぎることのないように造型されている。

大将、「一夜、五の宮の奏し給ひしをなむ」。君、「五の宮の御心ぞ、いとあやしきや。「かく、いたづらにてあり」とにやあらむ、「我はしも、憎まじ」などのたまひしを、この頃、音もし給はぬは、かう聞き給ひてなりけり」。大将、「世の中のあだ人」とな



む騒がれ給ひて、世をばないがしろに思ひて、御前にも、慎むことなく、よろづのことを奏し給ふや……」とのたまへば、

〔蔵開・中・五五二―五五三頁〕

このように、「蔵開」での五の宮は、文書が講じられる場に存在するだけでなく、帝の御前で春宮の素行や梨壺のことを暴露した（蔵開・中・五三九頁）ために、評価を落としている。文書を書くことのできた特別性は打ち消され、へ琴の一族である仲忠に匹敵する人物として描かれることは決していない。

さらに天皇家と仲忠の対比として、もう一人源涼との関わりも含めることができる。涼は臣籍においてはいるが、嵯峨院の皇子であり朱雀院の異母弟にあたる人物である。そのような天皇家の血をひき、また仲忠と同じくすぐれた琴の名手である涼よりも、仲忠が、

さらに難なき、帝の御婿なり。「源中納言、なずらひたり」と言ひしかど、今は、いとこよなし。

〔蔵開・上・四八六頁〕

と、すぐれた人物として描かれることで、へ琴の一族はいつそう際立つのである。

### 三、へ琴の一族のあるべき姿へ

今まで述べてきたように、「蔵開」では、へ琴の一族が、際

立つことで藤原氏・正頼一族・天皇家から距離をおき、独自性・優越性を保っていることがみてとれる。次の「国譲」ではさらにそれが押し進められ、「楼の上」での秘琴伝授へとつながっていくのだが、単にへ琴の一族が他から浮かび上れば良いというわけではない。「蔵開」で確立するへ琴の一族が、他に取戻まれることを防ぐ姿勢は、あくまでも純粹なへ琴の一族として琴を継承し、犬宮を入内させるために必要なことだと考えられるのである。今回は「国譲」については考察を加えなかったが、「蔵開」と同様に考えると、仲忠が立太子争いに消極的である理由の一つとして、梨壺の後見となった場合、仲忠が藤原氏として外戚に立つことを避ける意味合いがあるということができよう。このように「蔵開」以後、すべての事柄は、「蔵開」で成立したへ琴の一族の立場を守り、さらにその立場を強めることを前提に起こっているのだといえる。

「蔵開」は、物語において新たな行く末を暗示させる出発点であり、その上で「楼の上」での秘琴伝授やその後予想される犬宮入内へ向けて、独自性を守ることでへ琴の一族が際立つという最初の一步をふみだした巻なのである。

### 注

〔一〕「うつつ物語」を俊蔭系（秘琴物語）、正頼系（貴宮求婚物語）、立太子争い物語」と把握する見方に立ち、秘琴物語を「俊蔭」

「春日詣（桂のみ）」「内侍のかみ」「蔵開・上」「楼の上・上」「楼の上・下」、貴宮求婚物語を「藤原の君」「忠こそ」「春日詣」「嵯峨の院」「祭の使」「吹上・上」「吹上・下」「菊の宴」「あて宮」「沖つ白波」、立太子争い物語を「蔵開・中」「蔵開・下」「国譲・上」「国譲・中」「国譲・下」とみる。

(2) 巻名および引用本文は、室城秀之氏校注「うつつほ物語全」（おうふう・平成七年十月）による。

(3) 伊井春樹氏「俊蔭の家集と日記類」「うつつほ物語」蔵開巻の意義——（「中古文学の形成と展開 王朝文学前後 継承と展開 4」和泉書院・平成七年四月）には、仲忠が受け継いだ文書についての詳しい検討がある。

(4) 三田村雅子氏「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉——繰り返しの方法をめぐって——」（「東横国文学」十五・昭和五十八年三月）には、「琴の音にこもる一族の執念を書かれた物があつづけることによつて、琴の意味性は維持されたのである。」とある。

(5) この点については、西本香子氏「宇津保物語」の藤氏排斥——（「明治大学大学院紀要」第二十九集・平成四年二月）に、「藤氏排斥」という言葉で詳しく説明されている。

(6) 前掲論文（4）では、天皇を琴のこよなき理解者と位置づけている。

(7) ただし、後の宮が兼雅の妹であり、次の「国譲」の立太子争いでは藤原氏そのものを体現する存在であることから、先に述べた〈琴の一族〉から藤原氏を引き離そうとする試みに合わないのではないかと思われるかもしれない。しかし、後の宮が藤原氏として疎外されるのは次の「国譲」からであり、この「蔵開」で問題になるのは、仲忠と兼雅の関係であつて、後の宮はいまだ問題で

はない。さらに、文書が講じられるのを聞くことができた人物の中では、後の宮は一人疎外されている。後の宮がいることを知つた帝が仲忠に文書を「みそかに」読ませ、後の宮が共にはつきり聞くことを許されていないところに、藤原氏を疎外する意識を見ることができよう。

(8) 齋藤正志氏「藤原仲忠の人物造形——秘琴〈漢学〉官職・御帯」——（「二松」三・平成元年三月）。

(9) 室城秀之氏「あて宮東宮入内決定の論理」——（「うつつほ物語の表現と論理」若草書房・平成八年十二月）には、「物語はあて宮求婚譚を政治的な〈横の系図の論理〉によつて王権獲得をめざす〈家〉の物語として展開させてゆく」とある。

(10) 竹原崇雄氏「宇津保物語」蔵開の構造——（「文学」第五十二巻第四号・昭和五十九年四月）には、「仲忠と女一の宮、東宮と貴宮という二組の夫婦の関係のあり方を描きつつ、仲忠の幸せ、貴宮の不幸せな境遇を対比的に描き出そうとするのが、「蔵開」の主題展開の方法の一つ」とある。

(11) 前掲論文（5）では、犬宮人内についてふれられている。

（あしだ・ゆきこ 本学大学院博士前期課程）